

東京大学大学院経済学研究科

事業名	福島県相馬地方の学校および地域との交流会			
実施期間	平成25年10月19日～10月20日			
場 所	福島県立相馬高校、Bridge for Fukushima 相馬基地、浪江町等			
参加者	外国人留学生	地域住民・企業等	その他	合計
	29 名	38 名	13 名	80 名

<実施内容>

福島県立相馬高校では留学生・高校生とで混合の班を編成し、経済実験を行った。経済実験とは、教室内で経済環境を再現し被験者の行動を観察することで、経済理論の妥当性を検証するものです。今回の実験では、油田をめぐる競争入札という経済環境を再現しました。5回の対戦の後、データ解析の時間を使って、高校生の震災体験発表と言葉の交換会を通して交流を図りました。最後に経済実験の解説を聞き、得点結果は票、写真撮影を行い、高校生との交流を持ちました。



“ふくしまけんがなおりますように”子どもたちの願いをかなえたい！

翌日は放射線から子供を守るインドアパークの清掃ボランティアを行いました。放射線の影響を考慮して外に子供たちを出したくないという要望から出来たインドアパークには自転車に乗る練習をする広いスペースがあります。このスペースの床をモップで洗い流したり、窓ふきをしたりしました。また乳幼児向け遊具を消毒布で拭いたり、飾り付けをきれいに直したり、雨の中を草刈りに出かけたりと精力的に活動しました。最後に、帰還困難地域浪江町を訪問し、震災から2年半も経過しているのに、いまだ手つかずの町を見ました。斜めに曲がったままの家屋、崩れたブロック塀、誰もいない駅舎前の整然と並べられた自転車、草ぼうぼうの水田に残されたままの船。2011年3月11日で時間が止まってしまった町の現状を見て、地元の方のお話を聞きながら、安心・安全とは何か、復興への道のりに思いを寄せることができました。

<参加者からのコメント>

ソリス・ヘスースさん(国名)/Solis, Jesus

福島留学生旅行は貴重な経験でした。土曜日、私たちは相馬高校に行き、地元高校生と交流会をしました。その時、津波の被害を受けた場所に住んでいた学生たちは自分の経験や仮設住宅の生活について発表して、その後、学生達と福島現在の状態と震災からの復興について話しました。その話しのお陰で、東日本大震災をもっと深く理解できるようになりました。その地震・津波・原発の発表は悲しかったのですが、交流会に楽しいこともありました。例えば、東大の留学生と相馬高校の生徒は経済実験のゲームをしました。その生徒たちは大変なことを経験したが、ゲームで笑ったり、笑顔で話したりして、私は感動しました。中島財団のお陰で、この旅行ができました。私は中島財団に感謝申し上げます。

今回の旅行を通じて、地震という自然災害と原子力発電所の予想を超えた事故の被害について改めて考えさせられました。

初日は福島にある福島県立相馬高等学校の学生達と交流ができました。実体験を語ってもらって地震と津波の怖さを知りました。

翌日はあいにく雨のため、NPO法人「Bridge for Fukushima」の事務所の掃除しかできませんでしたが、活動内容を聞かせてくださいました。被災者に必要なのは物資の提供だけではなく、不安を解消してくれる場所も重要です。例えば、子供が自由に遊べる場所、お母さん達の相談事、心配事の話し合いの場などです。

午後は原子力発電所の近くに家を持つ方の話を聞きながら、爆発が起きた原子力発電所の10km圏内まで案内していただきました。津波がもたらした被害の残酷さ、放射能の影響で家屋・乗り物などが汚染され、使い物にならなくなった虚しさを目の当たりにしました。自然災害と原子力発電所の被害の大きさに驚きました。

東日本大震災から2年半経った現在でもその影響に苦しんでいる方がたくさんいます。地震大国の日本でさえ被害を小さなものに止めることができませんでした。これから何が起きるかわからないので、最悪のシナリオを頭の隅に置いて、準備をする必要があります。